

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530552
 研究課題名（和文） コヒアラント・アプローチによる精神的健康の社会－認知論的規定因の検討
 研究課題名（英文） Social-cognitive approach to the coherence in subjective well-being.

研究代表者
 堀毛 一也 (HORIKE KAZUYA)
 岩手大学・人文社会科学部・教授
 研究者番号：10141037

研究成果の概要（和文）：

本研究では、精神的健康（主観的 well-being）について、関係性×状況の快適さ・充実感評定にみられるコヒアラント・パターン（首尾一貫性）の特徴的相違を抽出するとともに、それぞれの背景にある認知－感情的変数の関連性の相違について検討を行った。4つの実証的研究を通じ、パターンにより関係的要因、状況的要因、相互作用要因の重み付けや、行動促進経路と行動抑制経路パターンの重み付けが異なること、また文化によりパターンの構成比や認知・感情変数の関連に相違のあることが示された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research project is to find the bottom-up coherent patterns of subjective well-being (SWB) in the ratings of relationships by situations. Four investigations were conducted and several coherent SWB clusters were elicited. The weight of relationships, situations and those interactions varied among these clusters. Moreover, the paths of cognitive-affective variables (BIS/BAS, regulatory focus, self-esteem, and optimism) to SWB differed from these patterns. Cultural factors also affected to these differences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：主観的 well-being、ポジティブ心理学、精神的健康、幸福感、コヒアランス、社会－認知論、相互作用論、国際比較

1. 研究開始当初の背景

精神的健康を示す代表的な指標である主観的 well-being（主観的幸福感・主観的充実

感、以下 SWB と略称）については、最近のポジティブ心理研究の興隆とともに数多くの研究が蓄積されてきた。そうした中で、

人々の有する総体的なSWBの規定因に関しては、安定的な個人差をもたらす特性論的なパーソナリティ要因がセット・ポイントとして well-being の位置づけを規定するというトップ・ダウン的な考え方と、それぞれの状況や領域でのSWBの蓄積によって総体的な位置づけが決まるとするボトム・アップ説が対立している。このうち後者については、世代差や文化差も含め十分なデータの蓄積がなく、また、関係性という重要な要因が見逃されているという大きな問題点があった。また、ボトム・アップ的なSWBの個人差の由来を説明する非特性的な説明理論も十分に整備されていなかった。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、SWB研究への新たなアプローチとして、Mischel & Shoda (1995)の認知-感情システム理論を援用し、数々の状況×関係性にみられるSWBの感じ方のコヒアラントなパターン（首尾一貫性：行動指紋）を抽出し、その背景にある認知・感情的変数の関連の相違を、こうしたパターンの相違を生じさせる要因として理解するという技法の有効性を検証すべく研究を行った。具体的には、研究の理論的背景となる認知-感情システム理論やポジティブ心理学に関する論考をまとめるとともに、実証的な研究では、コヒアラント・アプローチとして、1) クラスタ分析による3つのwell-being（感情的・心理的・社会的）を通じたコヒアラントな個人差パターンの抽出を行い、2) 各クラスターごとに、well-beingの規定因としての認知・感情的変数の関連性の相違の検討を試みた。認知-感情システム理論との関連は、1) が具体的な状況・関係性に基づく行動評定のコヒアランス（行動指紋）を示し、2) がパーソナリティを構成する認知システム内の要素間の関連性の相違を示すことになる。こうした認知・感情的変数の結びつきの相違によって、状況や関係の選好・選択に相違が生じ、各種の充実感の感じ方が一定のパターンを示す形で規定されると考えた。また、3) こうしたパターンの世代間関連性の検討や、4) 文化差に関する検討も行い、精神的健康に対するコヒアラント・アプローチの有効性に関する検証を試みた。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では理論的論考をまとめるとともに、4つの実証的研究を行った。

(1) SWBの測度とコヒアラントなパターンおよびその規定因に関する検討：大学生116名（男性45名、女性71名）を対象とする質問紙調査。内容は、辞書的研究（堀

毛,2001）をもとに抽出した6つの関係性×12の場面における快適さ評定と、感情的・心理的・社会的・全般的WB尺度や自尊感情・楽観性・制御焦点等10種の認知的変数に関する自己評定。

(2) 経験サンプリング法によるSWBと感情変数の関連の検討：上記参加者のうち、71名を対象に、1週間にわたり1日3回ランダムな時間に携帯電話で合図し、その時の気分や活動評定を求める経験サンプリング調査（以上2007年度）。

(3) 親子のSWBや認知・感情的変数の関連：学生263名とその両親500名に対する質問紙調査（両親398名から回答：回収率78.2%）。測定内容は1）とほぼ同一だが、先の研究で相関のみられなかった一部の尺度を削除し、新たにHuman strengthsや精神的健康に関連する他の変数(SOC, Hardiness等)を加えた（2008年度）。

(4) SWBやコヒアランスの文化差に関する検討：日中米の国際比較研究。日本人大学生219名（岩手大学、男性90名、女性129名）、中国人大学生105名（北京工科大学珠海校、男性59名、女性46名）、アメリカ人大学生54名（Hobart and William Smith Colleges、男性15名、女性39名）に協力を得た。質問紙の内容は、5人の役割人物に5つの集団関係および全般的評価を加えた11の関係性×10場面に関する快適さおよび充実感評定と、4つのWB尺度、および自尊感情、楽観性、制御焦点尺度による自己評定。

4. 研究成果

(1) 理論的背景に関する論考

本研究の理論的背景に関する論考として、コヒアランスという考え方の重要性や、認知-感情システム理論の主張について、最新の研究成果をまとめるとともに（図書②）、SWBを含むポジティブ心理学の最新の研究動向に関する概説を上梓した（雑誌①、図書③）。また、図書①では、編者として、本邦におけるポジティブ心理学の研究動向を広く展望できるよう企画・編集を行った。

(2) SWBの測度とコヒアラントなパターンおよびその規定因に関する検討

まず、SWBの三つの側面（感情的・心理的・社会的）のそれぞれについて、対応する尺度による測定を行った。感情的充実感(Emmons, 1986)については、先行研究どおり、ポジティブ感情（の高さ）とネガティブ感情（の低さ）の2因子が得られた。心理的充実感に関しては、Ryff（1989）の尺度を使用した。邦訳としては西田(2000)と福沢・山口(2007)の双方を利用した。西田の尺度では、Ryffと同様の、自己受容、個人的成長、人生目的、環境制御、自律、積極的人間関係という6因子が抽出されたが、福沢・山口の尺度

では、環境制御に関連する因子が抽出されず、変わって尺度内の逆転項目が集まった「一般的適応感」の因子が抽出された。社会的充実感に関しては Keyes (1998) の尺度を使用した。全項目版を用いても、短縮版を用いても、先行研究どおりの尺度が抽出されず、先行研究と共通性のみられた「社会一体感」因子のほかは、「社会不信感」「社会非受容感」、「社会価値感」「社会期待感」因子として結果をまとめた。これらの3尺度の下位因子について二次因子分析を試みたところ、第1因子としては社会的充実感に関連する因子を中心とする「社会的信頼感」が、第2因子としては感情的充実感や一般的適応感を中心とする「感情的幸福感」、第3因子としてはポジティブな対人関係や自己受容を中心とする「対人的元気感」が抽出され、社会的・感情的・心理的という3つのSWBの関係構造がほぼ明らかになり、これらをまとめて「フラリッシュ(元気感)」として位置づけた。さらに、これらの尺度得点についてクラスタ分析を行ったところ、4クラスタが得られたが、得点の相違を行動指紋として検討したところ、期待したようなSWB得点による交互作用はみられなかった(学会発表⑦)。すなわち、こうした得点に基づく分析だけでは、ボトム・アップ的な個人差の抽出には不十分であると考えられた。

そこで次に、同一の参加者に、6人の役割人物(親しい同性の友人、両親、ライバル、初対面、権威者、有資源者)について、12の状況(買物、見舞い、雑談、チャレンジ、パーティ、気晴らし、課題解決、旅、スポーツ、仕事、講義、お参り)での相互作用を想定させ、そのさいの「快適さ」を「ここちよい〜気まずい」の7件法で評定させた結果からクラスタ分析を行った。それぞれの評定値を基準化した得点をもとに、Ward法、平均ユークリッド距離を用いて階層的クラスタ分析を行った。結果から、3クラスタを最適解として抽出し(第1グループ33名、第2グループ41名、第3グループ32名)、各グループの特徴を検討した。相互作用の快適さ認知の相違(素点)は、主として状況よりも関係性によって規定されており、第1グループは、ライバルや初対面、権威者との相互作用を快適と判断していたのに対し、第2グループは、相対的に両親との相互作用を心地よいと感じ、有資源者との相互作用を気詰まりと認知する傾向がみられた。第3グループは全般に快適さ評定が低く、とりわけ、初対面、ライバル、権威者などとの相互作用を気詰まりと感じる傾向が強かった。引き続き、心理的・社会的充実感得点、および制御焦点得点のグループ間差異を、一要因分散分析により検討した。その結果、心理的充実感のうち、人格的成長(F=5.04, p<.008)、人生目的

(F=6.41, p<.002)、積極的他人関係(F=3.34, p<.034)に有意差がみられた。多重比較の結果、いずれも第1グループの得点が第3グループの得点よりも高かった。最後に、制御焦点とSWBの関連について、グループごとに、制御焦点を説明変数、それぞれのSWBの側面を目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、人格的成長得点に関しては、第1・第3グループでは促進焦点が主要な説明因となるのに対し、第2グループでは、予防焦点も有効な説明因となることなど、グループによってSWBの規定因に相違のみられることが示された(学会発表⑥)。

さらにこれら3グループの特徴について、関係×状況の被験者内分散分析を行ったところ、第2グループでは状況による変動が高く、第3グループでは関係による変動が高いこと、また第1グループでは交互作用効果による変動が低く、それぞれのSWBに関するボトム・アップ的な規定因に相違がみられることが示された(図1)。さらに、各クラスタにおける行動促進・抑制傾向、制御焦点、楽観性、自尊感情の関連について Amos を用いたパス解析で分析を行った結果、図2に示されるような関連が仮定され、たとえば第1グループでは、行動促進・抑制の双方のパスがSWBの有効な規定因として機能するが、第2グループでは行動抑制を中心とするルートが有効な規定因になるという相違のみられることが明らかになった。こうした結果から、SWB研究には、コヒアレントなパターンを考慮したボトム・アップ的な分析が重要な

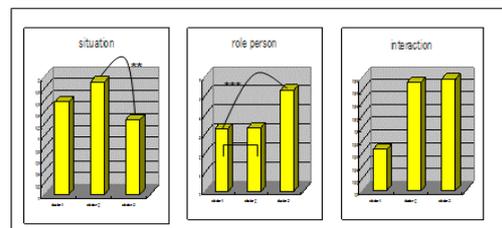


図1: クラスタによる状況×関係性得点の個人内分散分析の説明率の相違

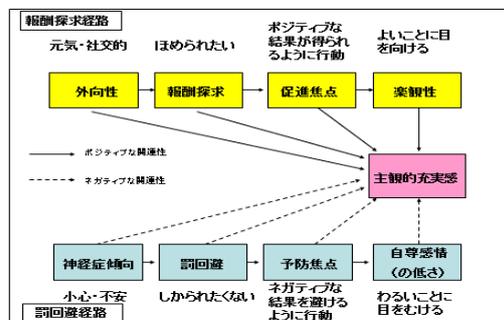


図2: コヒアランスの相違を生起させる認知-感情的変数の関連性

意義を有するとの結論を得た（学会発表④）。以上の成果に関しては、日本心理学会のシンポジウムで報告するとともに、論文②として概要をまとめた。

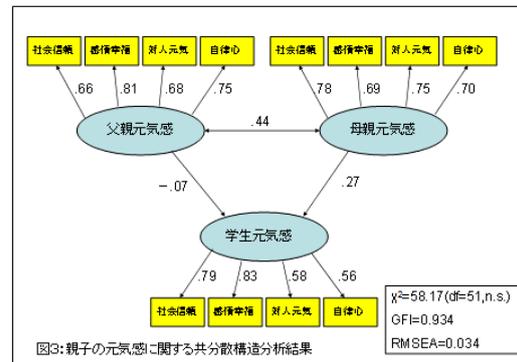
（3）経験サンプリング法によるSWBと感情変数の関連の検討

経験サンプリング法により得られた GACL を用いた日常的気分の評定結果について、参加者×27回のデータをこみにした主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転により4因子解を妥当な解として抽出した。第一因子は、「不快な、不機嫌な、いらいらした」など5尺度の負荷が高く、negative 気分と命名した。第二因子は、「活発な、積極的な、活動的な」など4尺度の負荷が高く、全般的活性性として active 気分と命名した。第三因子は、「ゆったりした、くつろいだ、落ち着いた」の3尺度の負荷が高く、全般的脱活性を示す calm 気分と命名した。第四因子は「眠い、うとうとした」の2尺度の負荷が高く、脱活性－睡眠傾向を示す inactive 気分と命名した。ひきつづき、各気分因子の因子得点を算出し、参加者ごとに27回の平均値と標準偏差を求めた。さらに、4因子×6日間（24回：最終日にデータ欠落者がいたため）の平均値データを変数、参加者をケースとする階層クラスタ分析（Ward 法、ユークリッド距離）を行い、最適解として5クラスタを抽出した。5クラスタそれぞれについて、日常感情の4因子×6日間の感情変動コヒアレント・パターンを作成した。その結果、クラスタ1は calm 優位型（n=22）、クラスタ2は感情不活性型（n=13）、クラスタ3は negative 優位型（n=13）、クラスタ4は感情活性型（n=12）、クラスタ5は active 優位型（n=9）と判断された。クラスタを要因とする分散分析により、クラスタ間の平均値の比較を行った結果、「行動抑制」や「罰感受性」において5%水準の有意差がみられ、negative 優位型の得点が高くなることが示された。心理的充実感に関しては、「環境制御」「人生目的」「他者関係」「自己受容」の4側面について、いずれも10%水準の有意傾向差がみられ、感情活性型や active 優位型の得点が高くなる傾向のあることが示された。こうした結果も、先のパス・モデルに示される行動促進とSWBの高さ、行動抑制や罰感受性とSWBの低さのつながりを支持する結果と解釈された（学会発表⑤）。

（4）親子のSWBや認知・感情的変数の関連

先に示した親子間のデータに基づき、SWBの規定因としてとりあげた、制御焦点、自尊感情、楽観性得点について、夫婦および親子間の相関を求めた。結果は夫婦間では促進焦点と自尊感情、母子間では自尊感情と楽観性

にいずれも弱い相関がみられるが、父子間には全く相関はみられず、全体にこれらの要因間の相関は低いことが明らかになった。さらに、フラリッシュを構成する3因子について夫婦間および親子間の相関を求めた。夫婦間には弱いながらもほぼすべての因子間に有意な相関がみられた。一方、父子間には有意な相関が全くみられず、母子間には感情的幸福感、対人的元気感において、弱い関連がみられた。図1には、親子の元気感に関する共分散構造分析の結果を示す。ここでも父親の元気感の子の元気感に影響を与えていないが、母親の元気感の子の元気感に弱いながらも影響を与えることが示された。こうした結果は、SWBの個人差に親子関係という環境的要因はさほど重要性をもたないことを示唆している。また、SWBのトップ・ダウン的説明ではセット・ポイントの規定因として遺伝的要因の影響の大きさが指摘され、幸福感の遺伝率は40%前後とされている（Cummins, 2003）。50%の遺伝的類似性をもつ家族内では、.20程度の相関がみられることになるが、母子間の相関はその予測に該当するものの、父子間の関連はきわめて低い。こうした相違が生じる理由については、今回の研究だけでは特定できず、今後データを蓄積して検討を加える必要がある（学会発表③）。



5) SWBやコヒアランスの文化差に関する検討

先に示した日・中・米の調査参加者に、4人の役割人物（親しい異性、同性の友人、職場の上司、競争相手）、および4つの集団（家族、仲間、課題解決、趣味）を具体的に想定させ、さらに初対面の人物および集団、関係全般を加えた11の関係性について、10の場面（買物・見舞い・雑談・チャレンジ・食事・気晴らし・課題解決・旅・スポーツ・儀礼）における相互作用の楽しさ・心地よさ（感情的WB）と充実感（心理的WB）を、それぞれ7段階で評定させた。結果について、WB評定(2)×関係性(10)×状況(10)×性別(2)×文化(3)の5要因による分散分析を行った。先の3要因が参加者内要因、後の2要因が参加

者間要因となる。結果を表1に示す。関係性および状況の主効果が顕著で、特に関係性の効果が大きいことはこれまでの成果と合致する。また、WB 評定の種別と関係・状況の交互作用、またこれら3要因の交互作用が有意となっていることも注目に値する。さらに文化の主効果も有意であり、性別を含めた5要因間の交互作用が有意となっており、SWB の評定にはこれらの要因が複合的な関わりをもつことが示された。結果の一例として、文化×状況×関係性による感情的 WB 評定結果をみると、従来の指摘にもあるとおり、日本では感情的 WB が全般に低く、また個人的関係性や集団の関係性が WB 評定に大きな影響を与えていることが示された。一方アメリカでは、特に家族や仲間集団との相互作用による WB が高く、初対面の個人や集団との相互作用における WB は相対的に低い。中国では初対面との相互作用でも WB が比較的高く、競争相手との相互作用で WB がやや低くなるのが特徴的であった(学会発表①②)。

表1：WB 種別×関係性(10)×状況(10)×性別(2)×文化(3)による5要因の分散分析結果

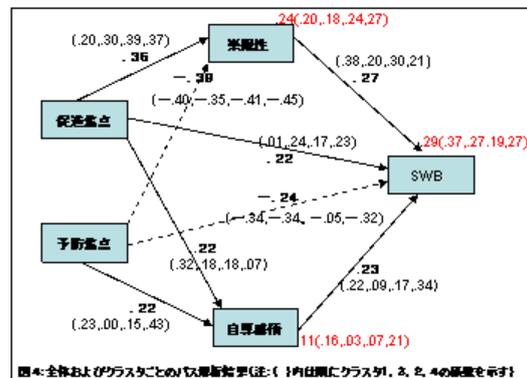
被験者内効果	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
WB	0.909	1	0.909	0.074	0.786
WB × 性別	0.035	1	0.035	0.003	0.958
WB × 文化	7.151	2	3.576	0.290	0.748
WB × 性別 × 文化	6.736	2	3.368	0.274	0.761
誤差(WB)	2745.784	223	12.313		
関係	9654.159	9	1072.684	69.878	0.000
関係 × 性別	414.839	9	46.093	3.003	0.001
関係 × 文化	2071.456	18	115.081	7.497	0.000
関係 × 性別 × 文化	469.652	18	26.092	1.700	0.033
誤差(関係)	30808.998	2007	15.351		
状況	1049.507	9	116.612	21.026	0.000
状況 × 性別	96.468	9	10.719	1.933	0.044
状況 × 文化	1131.963	18	62.887	11.339	0.000
状況 × 性別 × 文化	108.064	18	6.004	1.082	0.364
誤差(状況)	11130.982	2007	5.546		
WB × 関係	110.002	9	12.222	3.457	0.000
WB × 関係 × 性別	15.365	9	1.707	0.483	0.887
WB × 関係 × 文化	76.057	18	4.225	1.195	0.256
WB × 関係 × 性別 × 文化	50.789	18	2.822	0.798	0.705
誤差(WB×関係)	7095.233	2007	3.535		
WB × 状況	37.700	9	4.189	3.120	0.001
WB × 状況 × 性別	8.650	9	0.961	0.716	0.695
WB × 状況 × 文化	26.449	18	1.469	1.095	0.351
WB × 状況 × 性別 × 文化	18.520	18	1.029	0.766	0.742
誤差(WB×状況)	2694.350	2007	1.342		
関係 × 状況	503.139	81	6.212	8.264	0.000
関係 × 状況 × 性別	113.642	81	1.403	1.867	0.000
関係 × 状況 × 文化	338.361	162	2.089	2.779	0.000
関係 × 状況 × 性別 × 文化	150.634	162	0.930	1.237	0.022
誤差(関係×状況)	13576.697	18063	0.752		
WB × 関係 × 状況	60.813	81	0.748	1.723	0.000
WB × 関係 × 状況 × 性別	48.742	81	0.602	1.386	0.013
WB × 関係 × 状況 × 文化	84.266	162	0.520	1.198	0.044
WB × 関係 × 状況 × 性別 × 文化	93.958	162	0.580	1.335	0.003
誤差(WB×関係×状況)	7844.958	18063	0.434		
被験者間効果					
性別	57.133	1	57.133	0.572	0.450
文化	3709.246	2	1854.623	18.562	0.000
性別 × 文化	788.131	2	394.066	3.944	0.021
誤差	22280.788	223	99.914		

さらに、全般的関係性を除く10の関係性×10状況に関する楽しさ・充実感評定を変数として、大規模ファイルのクラスタ分析を行った結果、4クラスタが抽出された。クラスタの内容を群別に見ると、SWB高群(n=116)、中高群(n=85)、中低群(n=112)、低群(n=66)となり、関係性と状況の交互作用パターンは一部を除き明確にはみられなかった。また、中高群と中低群の間には、初対面者や初対集団との相互作用において楽しさや充実感が逆

転し、中高群は苦手と感じる傾向を持つことが示された。一方、国別にみると、高群では中国・米国ではそれぞれ47%、43%が高群として分類され、またアメリカでは中高群とあわせると79%に達するのに対し、日本の参加者では、両者をあわせても42%にすぎず、中低群に分類される者が40%を占め、全般にSWBの低いことが明らかになった。

また、認知・感情的変数として、これまでの研究成果から自尊感情、楽観性、制御焦点(促進焦点・予防焦点)をとりあげ、同時にLyubomirsky, et al. (1999, 島井他訳, 2004)による主観的幸福感尺度について国ごとに得点を算出し、国別に一要因分散分析で平均値の相違を検討したところ、いずれも主効果が0.1%水準で有意となり、自尊感情では中>米・日、楽観性では米>日・中、促進焦点については米>中>日、予防焦点については、日・中>米、SWBについては、米・中>日と、それぞれ特有の相違があることが示された。

さらに、先に抽出されたクラスタごとにこれらの変数の得点の相違を一要因分散分析で検討すると、予防焦点以外はすべてクラスタの主効果が0.1%水準で有意となり、低、中低、中高、高の順に得点が高くなることが示された。最後に、参加者全体、および4つのクラスタごとに、図2に示したモデルに添って図4に示すパス解析を行った結果、全体的には、ほぼ仮説どおりのパスが得られるとともに、すべての認知・感情的変数がSWBの有効な説明因となることが示された(GFI=.0995, CFI=0.988, RMSEA=0.096, AIC=32.395)。促進焦点→楽観性→SWBというパスはポジティブな関連性を持ち、いずれのクラスタでも安定した関係性を示している。一方、予防焦点→自尊感情→SWBというパスは、クラスタにより関連性の様相に相違が見られることが示された。また中国のデータでは、全体にパス係数が低く、これらの要因が説明因として十分に機能していない可能性のあることが示された。



以上の諸研究を通じ、全般に主観的well-being研究に対するコヒアレント・アプローチの有効性を、さまざまな角度から示し

得たと考える。応用的側面まで研究内容を敷衍できなかつたことが反省点としてあげられよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 堀毛一也、概説／ポジティブ心理学の展開、現代のエスプリ、査読なし、512、2010、5-27.
- ② 堀毛一也、コヒアラント・アプローチによる主観的 well-being の個人差の探求 (Well-being を目指す社会心理学の役割と課題)、対人社会心理学研究、査読なし、9、2009、2-7.

[学会発表] (計7件)

- ① 堀毛一也、親子の主観的充実感およびその規定因の相互関連性、日本社会心理学会第50回・日本グループ・ダイナミックス学会第56回合同大会、2009年10月10日、大阪大学
- ② Kazuuya Horike, et al. Coherent approach to the individual differences in subjective well-being (II).、XXIX international congress of psychology.、2008年7月23日、Berlin,Germany.
- ③ 堀毛一也・松岡和夫 行動接近・抑制傾向と日常的感情のコヒアランス・心理的充実感の関連、日本グループ・ダイナミックス学会第55回大会、2008年6月15日、広島大学
- ④ 堀毛一也、コヒアラント・アプローチによる主観的充実感の規定因の検討(1)、日本心理学会第71回大会、2007年9月18日～20日、東洋大学
- ⑤ Kazuuya Horike, et al. Coherent approach to the individual differences in subjective well-being (I).、7th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology.、2007年7月25日～28日、Kota Kinabalu, Malaysia.

[図書] (計3件)

- ① 堀毛一也 (編著)、ぎょうせい、ポジティブ心理学の展開－「強み」とは何か、それをどう伸ばせるか－、2010、212ページ
- ② 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也 (共著)、有斐閣、パーソナリティ心理学－人間科学、自然科学、社会科学のクロスロード、2009、300ページ
- ③ 堀毛一也、ポジティブ心理学の発展、(細江達郎・菊池武烈 (編著) 新訂社会心理

学特論)、2009、108-129(分担執筆)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀毛一也 (HORIKE KAZUYA)
岩手大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：10141037

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

松岡和生 (MATSUOKA KAZUO)
岩手大学・人文社会科学部・教授
織田信男 (ODA NOBUO)
岩手大学・人文社会科学部・教授